ゴールデン街の風太郎

甘和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴールデン街の風太郎

【Ｎコード】
Ｎ８７３６Ｚ

【作者名】
甘和

【あらすじ】
放課後、校舎で時間をつぶしていた転校生のミリ。
そこへ声をかけてきたのは、同じクラスの男子生徒、風太郎だった。話の流れで学校近くの彼の実家に雨宿りへ行くことになった。
そぞろ歩いて着いたのは全国に名を轟かす飲み屋タウン、新宿ゴールデン街。風太郎の父親はここでバー［ブリーズヒル］を営んでいるという。

おっかなびっくり、店に入り、やがてわかったのは、この父親が

裏の職業として退魔師を営んでいるということ。そして、風太郎もそれを手伝っているらしい。

この雨宿りをきっかけに、ミリはこの親子と深く関わっていくことになる。

さてさて、何が起こるのやら。

ミリと風太郎

1

「ドゥミ……」と呟いて、少女は背伸びをした。
その表情は、見上げる空とシンクロして、どんよりと曇っていた。
ため息をつきながら、夏らしいぶ厚い雲を眺める。
強くない、弱くもない、ただただ辛気くさい雨が降っている。

放課後を告げるチャイムが鳴ってから二時間。図書室を閉室時間だと追い出されて十数分。
彼女はひたすら物憂げな表情で、雨足と腕時計の観察に精を出していた。
背景には、照明の落ちた校舎玄関。全校生徒分のシューズロッカーがずらりと並んでいるが、この時間では上履きを放り入れる生徒はほとんどいない。

彼女には、家に帰りたくない理由があった。
そして、暗く静かな校舎玄関でモタモタする理由も。

転校して来て、三日め。あれこれ頼りない。
いつまでも教室には残れない。図書室にもいられない。
友だちは、まだいない。
クラブには入っていない。
学校に残る理由はない。でも、行く当てはない。
だから、校舎から離れられない。
どうしていいか、わからない。
どこもかしこも居場所がない。
傘はあるけれど、ないないづくし。

上手く韻を踏めていないラップを、脳内でリフレイン。
脳内リズムに合わせて、また、背伸び。足指で全身を押し上げる。
「ドゥミ……」
十秒ほど静止して、かかとを勢いよく降ろす。ポニーテールがぽよんと揺れた。
着地間際に、脳内のつぶやきが、即興ラップのように口をついてこぼれた。
「ないない」
思いのほか大きな声に自分で驚く。
思わず、左右十五度くらいずつ、きょろきょろして、聴衆がいないことにほっとする。
だが、彼女のライムに、いつのまにか真後ろにいた者がしっかりと鼓膜を震わせていた。
「なにがないのさ」
驚きと恥ずかしさで頬の温度を上げつつ振り向くと、見知った男子の姿。
「！……」
「よお」
「あ……」
「ん？」
「確か……」
「俺の名前、わかんないの？　真後ろに座ってるやつくらい覚えとけよ」
「え、と……」
唇は、あ行の形に開いたが、音が出てこない。
そのまま、十秒の沈黙。
「ま？」
「は～。一文字だけは覚えててくれたか。間守、マモリ・フウタロウ！」

「そう。間守君」
「高見さんだよな」
「うん、高見リエ」
「挨拶でいってたよな。ちっちゃいからミリ。前の学校でのあだ名って。身長は？」
「百四十七」
「ミリ？」
「え？　ううん、センチ」
勢いよく否定の声を出してから、冗談だと気づいた。そのあせりように風太郎は微笑んだ。
身長は、ミリより頭半分以上高い。
透き通るような白い肌と、人なつっこく強い光をたたえた瞳。
タワシみたいにイガイガと立った、濃いグレーの短髪。
白黄ボーダーのTシャツからは、薄いが筋肉質の体がうかがえる。
「で、何がないんだよ」
「……やっぱり、聞こえてた？」
ふたたび、ミリの頬が朱に染まった。
「声、でかかったもの」
「んっとね、うちに帰りたくなくて」
「わけありかあ。家族のアレ的な。立ち入っちゃまずい感じの」
「いやいや。そんな深刻じゃなくて」
首を振りつつ、右手を左右にあおぎ、全力で否定する。
しぐさのいちいち生真面目さがにじみ出ている。
「話せる？」
「話せるけど……」
「聞かせてくれよ」
「でも、つまんないよ。笑っちゃうよ。バカな理由だもの」
「ぜひ。バカなこと好きだから」
「はー」
なかなか引いてくれない同級生に溜息ひとつ。

二人っきりの校舎玄関、好奇心で目を輝かながらお願いする風太郎に、ミリは折れるように話し始めた。
「んーとさー。幽霊がね……出るの」
風太郎は、顔の筋肉を総動員して「ほう」という表情をつくった。
「ねっ。バカでしょ」
「いや、えっと。すっげー興味ある。ねえ、うちの店、寄ってかない。話、聞かせてよ」
「ん……お店？」
「うん。飲み屋。すぐそこで父さんがやってるんだ。そっちはどこ？　住んでるの」
「中野新橋」
「微妙な距離だな。雨宿ってけよ。ジュースくらい出すさ」
「うーん……」
「よし、決定。さあ、傘、開いて」
ポンと背中をひと叩き。
「じゃ……はい」
二人は、揃って校門を後にした。
灰色の空の下、青とピンクの傘が、緑鮮やかな遊歩道を動いていく。
うねうねと脈打つ道沿いの並木には、区役所の担当が適当な人間だったのか、白樺、銀杏、クヌギなど様々な種類が混じっている。雨しずくのおかげで、どれも一段と緑が鮮やかだ。
六車線もある国道の両岸はデパート、オフィスビル、役所と巨大な建築物だらけ。そんな風景のど真ん中に古色蒼然とした神社があり、巨大な鳥居が口を開けている。
「ここを通り抜けりゃすぐだから」
二人は神域へと足を踏み入れる。
そぼ降る雨に、参拝客は一組だけ。でっぷり太った中年男二人が相合い傘。頬が触れ合わんばかりの距離で、見つめ合い、なにやら祈願をしている。

そんな熊同士のデートなど視界に入らない風を装って、風太？は拝殿に目礼をした。その姿を見て、ミリも小首を下げた。
拝殿の脇を通り、狭い石段を降りると神社の裏に出る。
小さな道を挟んで、数本の路地が並んでいる。どの路地も、大人二人が両手を広げればつかえる道幅だ。
風太？は、迷いなくその内の一本に歩を進めた。両脇に鉄製の柱が立ち、その上に『新宿ゴールデン街』と紅い看板が掛かっている。
両側には、すき間なくびっちりとバーが軒を連ねていた。。
どの店にも、店名の書かれた看板が掛かっており、思い思いのデザインが楽しい。
「ほぁ～」
ミリは間の抜けた声を出しつつ、物珍しげに辺りを見回している。
当然だ。雨に濡れたゴールデン街が放つ、独特の雰囲気と匂いは、真っ当な女子高生の生活圏にはまず存在しない。
彼女は今、外国を訪れたような気分でいた。すなわち、興味津々、不安も津々。
路地の中ほどにある店の前で、風太？は足を止めた。
「ちょっと、待ってて」
そういいのこして、一軒のバーに入っていく。
店の名は『ブリーズヒル』。［準備中］の看板がかかっている。
ドアの前に一人残されたミリは、所在なげにピンクの傘をくるりと回す。
黒髪のショートボブで、白いカッターシャツに赤いリボン、スカート柄はグリーンのチェック。清潔感溢れる夏の制服は、清潔感のない風景に妙になじんでいた。
「ドゥミ……」
お得意の背伸び。限界まで足指を伸ばしたら、頭の中で数を数える、それがいつもの癖。
十八まで数えた時、数軒先の店がガチャンと、大きな音を立ててドアを開けた。ロングヘアーで真っ白い顔をした女性が看板を出し

つつ、通りに不似合いな女子高生を目に留めた。目が合った。
ミリは、ゆっくりと小さく頭を下げる。女性はニヤリと笑みを見せてドアを閉めた。
続いて、ミリの真後ろでもドアの開く音がした。驚き顔で振り向くと、スキンヘッドの太った中年男性と目が合った。彼も看板を出しつつ、ニヤリと微笑んだ。
何をされるわけでもないし、敵意のなさを笑顔で表現してくれているのも伝わってはいる。
だが、心細さはつのる一方だ。
まっすぐ帰った方がよかったかな。そう、ミリが思い始めた頃に、目の前の扉が開いた。風太?が顔をのぞかせる。
「いいよ。入って」
そんなに親しくもないのに、この状況では顔も声も頼もしく懐かしい。
「おじゃまします」
店に足を踏み入れながら発した小声には、心細さから解放された嬉しさがこぼれていた。
顔を上げると、店の全景が見渡せた。ミリの頭に浮かんだ言葉はひとつ。
狭い。
間口から想像した以上に窮屈な感じだ。向かって右手にカウンターテーブルがあり、イスが十脚、イスと壁の隙間は四十センチもないくらい。
「いらっしゃい」
店の様子に圧倒されているミリへ、涼しげな女性の声がかけられた。
「確かにミリサイズだ」
続いて、気持ち低めな男性の声。
カウンター内は壁全面が棚になり、安そうな国産ウイスキーが並

び、ところどころアクセントのように、人形や謎の置物が鎮座ましましている。
カウンター内の様子に圧倒されているミリへ、女性が、座って、と手ぶりで促しつつ、コーラを出してくれた。
歳は二十歳くらいだろうか。桜色の長袖Tシャツ。ショートカットで細面、つぶらな瞳が可愛らしい。全体的に細く、長身で、しなやかな印象だ。
男性の方は、二十代なかばだろう。マッチョではないが、そこそこ筋肉質。眉は濃く、目元くっきり、小判型の顔、古いハンサムというか、時代劇役者にいそうな感じだ。グレーのTシャツを着て、右手首に数珠をはめている。ぼさぼさとした中途半端な長髪がむさ苦しい。
女性は、カウンターで頬杖をついている風太郎にも声をかけた。
「何か飲む？」
「ノンアルコールビール」
長髪が吹き出した。
「可愛げのないもん、飲むなあ」
「可愛げのなさは、父さん似さ」
「んなわけねーだろ。俺、可愛いって評判なんだぜ。なっ、モモちゃん」
しなやかなお姉さんは笑いながらかわす。
「評判？　どこで？　あの世？」
じゃれ合いの生暖かい空気が場を包む。誰もが、しようがなさに口元をゆるめる。だが、ミリだけは笑っていなかった。風太郎の一言が妙にひっかかっていたからだ。
風太郎は、隣席でバカにしたような笑顔でカウンター内を眺めている。
ミリは、こらえきれず、小声で訊ねた。
「お父さん……なの？」
「ああ」

「何歳？」
「やっぱ、ちょっと若すぎるよな。まあ、色々あってさ」
軽く、だが、真正面からお茶をにごされてしまった。人それぞれ、事情ってものがあるしなと、ミリはこの件を掘り下げない話題に仕分けることにした。
ふと見ると、問題の“父さん”は、カウンター端に飾ってあるアイヌ衣装の少女フィギュアに声をかけている。
「ロコちゃんなら、俺のさ。大人の可愛げってのがわかるよな？」
冗談っぽければ笑ったのだが、かなり真剣に話しかけていた上、誰も突っ込む気配がなかったので、ミリはこの件もこれ以上掘り下げないことにした。
「あっ、忘れるとこだった」
風太？はビール風清涼飲料の缶をぐっと干してから、同級生を見た。
「んっと。そんでさ、ミリ。幽霊のこと、聞かせてよ？」
「ああ」
びっくりした顔で口を開くと、くわえていたストローがグラスの縁に沿って一回転。
「あの、今日ね。家で、お祓いしてるの」
「お祓い？」
「そう。引っ越してきて一週間経つんだけど。変な家なの。毎晩、子どもの泣き声と足音がして」
「そいつはタチが悪いな」
まだ、ほとんど話してないのに、カウンター内から口を挟まれた。
「そういうのはだいたい」
「父さんは黙ってて。ミリがしゃべってんだから」
風太郎がツッコミに”父さん”は、口を尖らせてうなだれた。
「ミリ、続きどうぞ」
「う……うん。ママがネットで捜してお願いしちゃったの。怖い顔のさ、ごっついお坊さんみたいな、霊能者」

父さんがニヤニヤしながら、口をはさんできた。
「そういうの。結構、高いんだろ」
「安くはないはずです。五万円、とかいってたかな」
風太？が飲み干した缶をつぶしながら、不敵に笑った。
「お祓いは、今やってんの？」
「四時に来ると行ってたから、もう、始まる時分？」
「父さん」
「そうだな、ミリちゃん、家、近いの？」
「え……え～？　あの、どういう展開ですか」
父さんは、頭をふって半端な長髪をなびかせてから、ゆっくりと口を開いた。
「俺がただでお祓いしてあげよう」
「はい？　おじさん、どういうこと？」
ミリは、思わず大声を出してしまった。
「大丈夫。悪いようにはしない。それと、おじさんじゃない」
おじさんであることを否定する男は、親指を立てて右拳を差し出し、自分を指さした。
「メイスケさんと呼んでくれ」
時代遅れ感あふれる決めポーズで、力強く微笑む。
外見も、言動もあやしさ満点のくせに、なぜか安心できる笑顔を見せる。
「ミリ。そうと決まったら、とっとと行こうぜ」
風太？が背中を押す。
「こわもての坊さんが帰っちゃう前に着かないと」
風太郎はミリを押し出しながら、一緒に外へ出た。
メイスケもカウンターから出て、「店、頼んだよ～」といい残しつつ、扉をくぐる。
その言葉への「は～い」という返事は、女性ふたりのハモり声で返ってきた。
「二人？」とミリが振り返った時には、ドアはもう閉まっていた。

◆

カーナビに導かれて、メイスケたちはミリの住むマンションを目指している。
車中は、ほぼメイスケの独演会だ。インチキな霊能者が多いから気をつけろだの、風太郎の同級生だから特別サービスだのと矢継ぎ早にまくしたてる。
ミリが言葉を挟む間はない。風太郎はやれやれといった表情で車窓を眺めるのみ。
そんな状況のまま、目的地に着いた。
ゲスト用の駐車場に、真っ赤な小型車を突っ込み、エレベータで五階まで上がる。

「結構、いいマンションだな」
メイスケが、くわえていた禁煙パイプを緑のショルダーバッグにしまいながらいった。
「おい」
メイスケがこづくと、風太？も車の中からくわえていたミント味のパイプを胸ポケットに入れた。
エレベータが開く。その真正面のドアには『高見』とネームプレートが掲げてあった。
メイスケが、うやうやしく会釈をしながら右手でドアノブを指し示した。
ミリは首をかしげ、溜息をつきつつ、ドアノブに手をかけた。
扉を開けた瞬間。凄まじい音圧に襲われ、全身の毛が逆立った。
何かのエンジン音？　いや、魚市場で耳にする種類のおっさんのダミ声だ。
「悪霊退散、怨霊退散、邪霊退散、亡霊退散！去れ去れ去れ去れ！高見家にあだなす邪悪なる霊よ！うらみ、つらみ、のろい、た

たり、すべて己に返す！カーッ！」

ミリは玄関まで入ったところで、両耳を押さえて、顔をしかめ、立ち止まってしまった。

その後ろから、小声で「おじゃましま～す」と言いつつ、メイスケたちが入ってくる。

「ミリちゃん、案内して」

案内も何も手狭な１ＬＤＫ。廊下を三メートルも歩けば、大騒ぎ真っ最中のリビングだ。

一列に進んでいく。

どんどんダミ声が大きくなっていく。

リビングに入ると騒音の元が確認できた。相撲取りなみに太った色黒な坊主が怒鳴っている。力一杯の下品ボイスで。

廊下、つまりミリたちに背を向けて、ミリの母と霊能者が並んで座っている。その前には白い布がかけられた祭壇が設えられている。そのさらに向こうにベランダが見える。

一心不乱に怒鳴り続ける霊能者も、ミリの母も、三人には気づいていない。

部屋の入口で立ち止まった風太？が、ミリにいった。

「部屋のすみっこを見て。で、俺の手にふれて」

「う、うん」

ミリは「？」と思いつつも従った。

そして、小さく声を上げた。

「えっ……」

祭壇の右側、部屋のすみっこに半透明の姿が見えた。

五歳くらいの三つ編みの女の子がしゃがみこんでいる。

頭を抱えて、おびえている。泣いている。霊能者を怖がっているようだ。

風太？が嫌みっぽくつぶやいた。

「あんだけ、怒鳴られたら泣くよ、そりゃ。あの子を身動きとれな

くしといて、悪いのはおまえだ、ここから出てけって怒鳴ってるんだぜ」
「怨霊退散。アビラウンケンソワカ、オンマニペメ、フムッ…う～…う～……喝！」
霊能者は急に静かになり、深くうなずいた。
ミリの母へと向き直る。
「うぉっほん」
痰がからんだような、汚い音の咳払いを一発。おごそかに語り出した。
「これで終わりました。もう、大丈夫です」
おっさんが見知らぬ三人組に気づいた。
「おや、そちらは？」
ミリの母は、娘たちを振り返る。
「ああ、娘です。お帰りなさい。それから。えーと……どちら様？」
風太郎が立ったまま、お辞儀を返す。
「はじめまして、同級生の間守です」
「その父です」
メイスケは手刀を切るように挨拶をし、そのまま、手を上下しつつ、部屋の中央へ進んだ。
「すいません、すいません、で、お母さん。あの、こちらの霊能者さん」
父の言葉を耳にして、風太郎がつぶやいた。
「またかよ」。
これから起こることがわかっているがごとき口調で。呆れ果てたような表情だ。
父は、息子の気持ちなど気にもせず、ハゲでデブな霊能者を指さした。
「インチキですよ」
「は……」
霊能者は、一瞬ポカンとした顔を見せたのち、凄い勢いで立ち上

がった。
「無礼なっ！」
ダミ声にふさわしい顔で、メイスケをにらみ付ける。でっぷりと太っている頬、二重あご、腹、すべてがぷるぷると揺れている。
メイスケは右手で霊能者の手にふれ、左手で部屋の隅を差した。
「あんた、あれ、見えるだろ？」
「う！」
霊能者はメイスケを振り払い、おびえる女の子がいるあたりへ、大股に向かう。
ミリの目には、さらにいっそうおびえる女の子の姿が見えている。
「う～、うがっ！悪霊退散、怨霊退散」
霊能者が部屋の隅に向かって、怒鳴り始めた。
しかし、ふたたび響いたダミ声は、すぐに遮られた。
「もう、やめてっ！」
ミリの母だ。
風太？が手をつないでいる。
メイスケが、霊能者の肩を叩いた。
「あんたのやり方じゃ無理。そりゃ、あんなに怒られたら、その子、しばらくはおとなしくしてるさ。でもな、何も解決しないぜ。帰ってくれ、用済みだ」
「うう、くっ……呪われるぞ、おぬしら！」
霊能者は、祭壇のかざりをガサッと鞄にかき入れて、わざと床を踏みならして出ていった。下の部屋から苦情が来るかもと、ミリが少し心配になるほどの勢いで。
メイスケは玄関の方を見やり、霊能者が帰るのを見届けてから、ミリの母へ語りかけた。
「お騒がせしてすいません。私がちゃんと始末します。あの、テーブルお借りしますね」
メイスケは、返事も聞かずにダイニングテーブルに着いた。
ショルダーバッグから紙と筆ペンを取り出す。正方形の白い紙の

中央に何やら模様を書くと、端をつまんでヒラヒラと宙に泳がし、乾かした。
「よし」とつぶやいてから、紙を置き、立ち上がる。
例の女の子がいるあたりに行き、しゃがみこんだ。彼女と何か話しているようだ。
こちらを振り返った。
「風太？、飛びのいいやつをよろしく」
「オッケー、父さん」
今度は風太？がダイニングテーブルへいき、さっきの紙を折り始めた。
父は息子が作業にかかるのを見て、顔を上げる。
「さてと」
メイスケはショルダーバッグから十センチほどの細長い試験管状の陶器を取り出した。
左手で天井の隅を指差す。陶器を右手に持ち、眉間にかざす。
小声で呪文をつぶやくと、白い陶器に赤と青の格子模様が浮かび上がった。
「はっ」
強く息を吐き、右手の陶器を天井の隅へ向けた。
「うがあああああっ」
おぞましい声と共に、声は天井の隅から陶器へ移動した。地獄から響くような叫びは、メイスケが陶器に封をするまで続いた。
険しい表情を見せていたメイスケだが、封をするとヘラヘラした雰囲気に戻った。
母と一緒に、ふたりの行動を見守るだけだったミリが、おそるおそる訊ねる。
「あの、今の声は？」
「邪鬼。欲だの、恨みだの、怒りだの、マイナス想念のことを邪気っていうんだが。それが凝り固まって意志を持った存在さ。あの子をいじめていた原因だね」

「えっと、つまり……これで、お祓いができたってこと？」
「いや、もう一仕事」
そういうと、メイスケはサッシを開けて、ベランダに出た。
空を見ている。いましがた、雨は止んだばかりだ。
「ミリちゃん、来てくれるかな。お母さんも」
ふたりはメイスケと並んで空を見る。
夕暮れ。虹。雲の切れ間、太陽の光が美しい。
「ミリちゃん。右手を、手のひらを上にして、空へ差し出してちょうだい。それから、お母さん、私の手にふれて下さい」
ふたりが言うとおりにする。
「風太郎。いいぜ」
風太？がミリの手に、折り上がったばかりの紙飛行機を置いた。
メイスケは部屋のすみに向かってうなずいた。
涙を手でぬぐい、微笑んで立ち上がる女の子の姿がミリたちにも見える。
女の子はメイスケの隣まできて、少し首をかしげている。
ためらっているようだ。心細げにメイスケの顔を覗き見る。
メイスケは、ゆっくりと確信に満ちた声でいった。
「大丈夫」
その声にうながされたのだろう。女の子は満面の笑みになって、ぴょんと飛び跳ねた。
彼女はみるみる小さくなり、ミリの手のひらの紙飛行機へ、吸い込まれるように搭乗した。
風太？がくちびるをすぼめて「ひゅっ」と息を吹く。
すると、空の高みからベランダへ、涼やかな風が吹き込んできた。
不思議な風に乗せられて。紙飛行機は、そっと離陸。
女の子は振り向いて手をふっている。嬉しそうだ。
飛行機はふんわりと空に浮かぶ。
高く、高く、どこまでも上がる。
風の描いた天への道を、ゆるやかに、かろやかに。

雨上がりの空、虹を越えて。
飛んでいく、小さくなる、空気に溶け込んでいく。
その姿が完全に見えなくなってからも、みんなで空を見ていた。

ヒュルリとメイスケ

2

奈良県吉野郡に、鬼邦という土地がある。
町からのバスは日に一往復。
世間からは、かなり距離のある空間だ。
その山には、鬱蒼とした森が広がる。
その村では、一面の田畑ばかりが目に入る。
鬼邦山も、鬼邦村も、自然に恵まれており、山菜、果物、鳥獣、魚はいくらでも採れる。
つまり、それだけ田舎だ、ということだ。

山と村の境に、小さな神社が建っている。
間守神社。
異界に通じる力を持つといわれる一族が、代々受け継いでいる社だ。
間守という名、人の世と霊の棲む山の関所、つまり、間を守るからとか。山に棲む魔の守りをするからとか。その由来は様々にいわれている。
ただ、どのいい伝えも、山に厄介な何かが棲むことを暗示していた。

事実、三十年ほど前。二つの事件が起こった。
春。
五人を殺めた連続殺人犯が鬼邦山に逃げ込んだ。
村人は、山に棲む魔が呼び込んだのだと噂した。
鬼邦の名は全国に大きく報道され、警察隊と報道陣で静かな山里

は騒然とした。だが、大規模な捜査にも関わらず、犯人は見つからなかった。また、遠く離れた土地での目撃証言が報告されたため、半月ほどで鬼邦での捜査は打ち切られた。
一気に喧噪は去り、すぐに別の事件へと人々の耳目は向かい、鬼邦はもとの忘れ去られた里に戻っていった。

そして、同じ年の秋。
殺人犯騒動の余韻がすっかり去った頃。
稲の刈り入れも終わり、祭りに向けて、村の誰もが心を弾ませていた。
ほとんどの村人が眠りに就いている時刻。外につながれている犬や牛馬が一斉に騒ぎ出した。
何事かと思い、外に出た人々は空を見上げて一様におびえた。
天球図さながらの星々が、突然現れた黒雲に墨で塗りつぶすかのように隠されていった。
空が闇に満たされるとおびただしい雨が降りはじめ、山から嵐が吹き下りてきた。
巨大な人影と共に。
外に出た人々は、嵐にさらわれて中空に舞った。
人影は彼らをつかみ、次々と呑み込んでいった。
叫び声は風雨にかき消された。
家の屋根は巨大な黒い手にはがされ、子のいる母は我が子を抱きしめたまま、仏間で拝んでいた老人は手を合わせたまま、つかまれ、呑み込まれていった。
半時間ほどで人影は山へと帰っていった。
すぐに黒雲も去り、満天の星空が戻ってきた。
あとには荒れ果てた村だけが残り、村人は五割方、姿を消していた。

この少しのち、村を訪れた修験者が人影を封印した。

だが、いまとなっては、当事者以外、誰も真実など知らない。
世間的には、暴風による被害とされている。
山奥のちっぽけな村のことだ。
出来事のあらましすら、そのまま、時の流れに埋もれきっている。

その後、リュウと名乗る修験者は、間守神社へ婿入りし、二人の子どもをもうけた。
メイスケ、セイジと名付けられた兄弟は、神社の跡取りとして大切に育てられた。
新たな守り役のおかげか、平穏無事に年月は過ぎていった。

◆

風太郎たちが、高見家からゴールデン街へ戻ってきたのは、午後六時過ぎだった。
『ブリーズヒル』には、まだ［準備中］の札がかかったままだ。
メイスケは扉を開けた。
「えっ？　ちょっ！」
桜色のTシャツを着た百六十センチほどのフェレットが、カウンター内から驚きと焦りに満ちた声をあげた。カウンター上では、三十センチほどのアイヌ衣装の女性が目を見開き、バンザイをしている。
「！えっ？」
メイスケの後ろにいたミリが、店内を覗き見て、驚きを音量であらわした。
フェレットは一瞬で人間の姿、モモに変身した。あたふたと手を顔の前で振っている。
アイヌ娘は、その場で脱力。カウンター上に横たわった。まるで、魂が抜けたように。
メイスケは、自らの頭を叩きながらカウンター内に入っていく。

無音で口を動かし、「やっちゃったー、やっちゃったー」と連呼している。
ミリは、目を丸くして入口に突っ立ったままだ。その後ろから、風太郎が彼女の目の前で手のひらをかざしてヒラヒラ、「おい」と声をかけた。
「ああ？」
心ここにないという返事だ。
「ミリ！」
風太郎が少し強く声をかけてみた。
「なっ……なに……？」
「とりあえず、入れ。座って水でも飲め」
風太郎は背中を押すと、やっと店内へ入った。メイスケに入口近くのイスを勧められたが、ミリはそれが見えてないかのようにポーッと進み、カウンター中央の席に座った。しきりに首をひねっている。
風太？は「う～ん」と声を上げつつ、首をかきつつ、困り顔で隣に腰掛けた。
「モモ、水」
ちょっと前まで巨大フェレットだった女性は、大きめのグラスにたっぷりの氷を入れたミネラルウォーターを出す。申し訳なさそうに、おそるおそるといった様子だ。
「どうも……あ！」
ミリは礼をいいつつ、そろりと遠慮がちにモモの顔を指差す。
「鼻」
モモの顔中央には、ピンクで台形をしたフェレットの鼻が鎮座していた。
風太郎が呆れ笑いしながら突っ込む。
「可愛いけどなあ」
あわてて、顔を隠すモモにメイスケも笑う。
ミリも釣られて微笑み、水を口にした。

「大丈夫かい」
グラス半分を一気に干した同級生に、風太郎が声をかける。
「うん」
まだ、心ここにあらず。
「ミリ、戻ってこい！」
風太郎、今度は軽く叫んでみた。
すると、彼女はぶるぶるんと顔を二回振り、両手で頬を勢いよく挟んだ。
頬をむにゅっと押したまま、言葉を出す。
「うにゅ、だいじょうびゅ」
「おかえり」
「ただいみゃ。だいじょうびゅ。フェレットとか生き物しゅきだし」
「ああ。そいつぁ、なにより」
「でも、あの、風太郎君。うちであったこと、モモさんのこと、そこで寝てるお人形のこと、疑問符だらけ……なんだけど……」
「だろうな」
「教えて、くれる？　このままじゃ、あの子が消えたのに眠れない」
「んー。だってさ、父さん。説明責任を果たしてくださいな」
ミントパイプをくわえながら、風太郎がメイスケにせまった。
「そうだな。防ぎようのない事故だったし」
「それはちがう。完全な人的ミス！　いきなりドアを開けない。モモたちもだ。くつろぐ時は、店のカギをかける。決めごとだろ？基本だろ、もう」
風太？のツッコミに、モモは神妙そうに深くうなずいた。だが、メイスケは罪悪感のかけらもない風で、両手をあおぐようにして言葉を遮る。
「ま、まっ、まあ、いいよ。とにかく、見られた以上、しょうがない」
メイスケは、しゃべりながらカウンターの中から出てきた。
「もう、ミリちゃんも身内ってことでさ。ぜ～んぶ、話しちゃおう。

どうせ、誰かにいっても信じちゃもらえないし」
それなりに焦ってるのか、早口になりつつ、汗もかきつつ、ミリの隣に座る。
「モモ、水割りよろしく。風太？、念のため、カギしめて」
水割りをぐっとあおると、メイスケはぐっとミリに顔を寄せて、語り始めた。
「奈良県に行ったことはあるかい？」
「いえ、あの……ちょっと」
「はい？」
「顔、近すぎ」
「エロおやじ。カウンターの中に戻れよ」
風太郎が、しょうがねえなあという口調でちゃちゃを入れると、メイスケは、ふてくされた表情でカウンター内へ戻った。父の威厳などかけらもない。そして、モモが差し出す強めの水割りを干すと、遠くを見るように目を中空に泳がせた。
「あれは、十八歳になったばかりの頃だから。もう、六年も前か」

◆

春の強い風が山間に吹き渡っていた。
新月だ。鳥も獣も声を立てない暗い夜。
木々の葉ずれと、手水舎の水音だけが闇に響いている。
すでに深夜一時をまわっており、間守家の人々、主の間守リュウと二人の息子は寝息を立てていた。

ザザッ、ガザザ、ゾザザザザザッ

木立をわけて、何かが動いた。

ガザッ、ザザザッ、バギッ、グギッ

枝の折れる音、草木のひしゃげる音が響く。
音が徐々にボリュームを上げて、暴力的な気配と共に神社へと迫ってきた。

ドムッ！

巨大な音と振動が、間守神社の境内を揺らした。

ドン！　ズン！　ガン！　ボン！

次々と轟く破壊的な音に、リュウたちが飛び出してきた。
雨戸を開けた三人の目に飛び込んできたのは、無残な境内の光景だった。
そこかしこが壊れている。
こま犬、手水舎、参道の石畳……神域のあらゆる場所が爆撃を喰らったかのように、砕け散っていた。
そして、境内に落ちている岩は、大人が抱えきれないサイズのものばかり。
想像を越えた光景に、声もない父子の目前へ、新たな岩が降ってきた。
それは賽銭箱にぶつかった。けたたましい金属音を鳴らして小銭が飛び散る。
リュウは岩の飛んできた方向をにらんだ。
間守神社は、山と里の境に建つ。その山側の柵の向こうだ。
木々の合間に黒い影が見えた。
「まさか」
リュウは、信じられないといった口調で言葉をこぼした。
影に、かつて自らが封印したものと同じ気配を感じたからだ。
ただ、大きさは、あの天を突く大鬼とは比べものにならない。柵

との比較で推し量ると、二メートルほどだろう。
さらに岩が飛んできた。轟音が響き、新たな穴が空く。
「おい、道具！」
リュウの野太い声に応えて、セイジが錫杖を手渡した。

ジャリン

錫杖飾りを鳴らして、リュウは境内に降り立つ。寝間着である白衣姿だ。純白の綿が発光したかのように、夜闇に浮かぶ。
柵のすぐ向こうで、影が巨岩を頭上に掲げていた。赤く光る目は白衣を狙っている。
百戦錬磨の山伏は、錫杖の先端を影に向け、大声で呪文を唱え始めた。影が岩を投げようとした刹那。錫杖の先端が明るく光り、稲妻が走った。

リュウには特殊な能力があった。
山に棲む精霊と会話をし、雷、炎、風、水……雷光を操ったり、火球を放ったり、さながら魔術士のように振る舞える。
体力も、精神力も大きく消耗するため、そうそう使える術ではない。
しかし、かつて、黒い鬼影を封印できたのもこの能力ゆえだった。

闇を真横に切り裂く稲妻は、影の顔面に炸裂した。

ズン

影は岩を落とした。青白い雷光に浮かび上がったのは、黒い鬼。
一言も発さず、踵を返し、一目散に逃げ出した。
リュウが後を追う。青いジャージのメイスケ、赤いジャージのセイジも続く。

黒鬼は、木々をなぎ倒しながら駆け逃げる。
時折、立ち止まっては、手近な岩を投げつけてきた。大地に半分がた埋もれた岩を片手で引き抜いて。大きさも一撃で巨木がへし折れるほどだ。
樹木をなぎ倒しながら黒鬼が走る。
リュウは、雷光や火球で追い打ちをかける。

戦いが始まり、一時間が過ぎた頃、リュウが倒れた。
特大の火球を放つと同時に、黒鬼の岩が右足を直撃したのだ。
足首はくるぶしからちぎれ、出血が激しい。
追っ手のダメージも見ず、黒鬼は上半身を燃え上がらせながら逃げていった。
「くそぉ」
リュウが声を出した。痛さより、追えない悔しさが勝っている。
そんな表情だ。
「メイスケ、こっちに寄れ、杖だせ」
リュウは、メイスケの差し出した錫杖の先端を握り、何やら唱えた。
錫杖飾りが赤く光り出した。
「俺に残った法力は全部移した。あれを逃しちゃいかん。追え。封印しろ」
「おやじ……」
「グズグズすんな！　見失うぞ！　行け！」
メイスケは一気に駆けだした。
「セイジ、お前は行くな。俺をおぶって帰れ」
「あ？　ああ、でも」
「もしもの時に、間守の者が全滅してちゃいかんだろ？　戻るぞ」
巨大な父親を背負い、セイジはその場を後にした。

人影の咆哮。
メイスケの気合。
肉を打つ音。
衝突音。
枝のひしゃげる音。
メイスケのうめき声。
人影のうなり声。

その夜、闘いは山中を移動しながら、途切れることなく繰り広げられた。
森の奥深くから、動物や鳥が逃げまどい、鳴き叫ぶ声がやまなかった。
命を削る死闘は、様々な音を奏でて、山を揺るがせた。

闘いの舞台となった場所では、木々が倒れ、岩が削られ、ぽっかりと広場ができた。
時にはメイスケが逃げた、
時には黒鬼が逃げた。
あちこちに広場を作りながら、彼らは森の最奥部に行き着いた。
苔むした岩壁が前途をさえぎり、ここが森の果てであることを示している。
岩壁には洞穴が開いていた。
その入口には、注連縄が張られ、奥に小さな祠が奉ってある。
かつて、間守リュウが鬼影に施した封印だ。

東の空が明らんできた。
濃い雲が立ちこめる、暗い朝の訪れだ。
祠の前、直径六メートル程の空間で両者はにらみ合った。
黒鬼はかなり小さくなっている。
メイスケの身長は百七十七センチ、それよりもひとまわり低い。

黒い霧を凝縮したような身体も、密度が薄くなり、向こうが透けそうだ。力が弱まっている、ということだろう。
一方、メイスケの姿も悲惨なものだ。
顔といわず、身体といわず、死闘の傷跡が刻まれていた。
左肘から骨が突き出しているのをはじめ、肋骨、腕、指、尾骨等、骨折は十箇所を越えており、内出血や裂傷は数え切れない。
メイスケは思う。勝つか負けるか、死ぬか殺すか。いずれにせよ、黒鬼の姿と自らの体力から、死闘の終わりが近いと。

黒鬼が腰をかがめた。
肉食獣が獲物へ襲い掛かる時に、狙いを定めるように。
メイスケは錫杖を構え直し、多量の出血と痛みで朦朧とする頭を振った。
黒い獣が飛び上がった。
その顔をめがけて、錫杖を振り上げる。

「っ！」

全身に走った痛みが、メイスケの動きを止め、一瞬、腕を上げるのが遅れた。
かぎ爪の付いた、黒く太い指が目前に見える。
死。
絶望と悔しさと怒りが交錯する。
「ぐあああああああ！」
視界が黒鬼の手で遮られる刹那、思いすべてを声に変換して叫んだ。

グォオオオオォー！

その時、突風が吹いた。

宙に浮いていた黒鬼は風圧に突き飛ばされた。洞窟へと放り込まれた。
風は上空にも吹いた。雲が押し流され、陽光が滝のように降り注ぐ。
黒鬼は、風に溶かされるように薄くなり、霧と化して洞窟の奥へと吸い込まれていった。
メイスケは、空を見上げた。ため息をひとつ。
洞窟の前へ進み、剥がれていた封印札を貼り直した。
大地へ、とどめとばかりに錫杖を突き刺した。
ゆっくりと真後ろに倒れた。
朝日がまぶしく、その爽やかな熱が身体にしみていく。
全身の痛みが毛穴から徐々に流れ出していくようだ。
まぶたを閉じた。
意識が遠ざかっていった。
「死ぬか」
そのつぶやきを最後に動かなくなった。

再び、風が吹いた。
穏やかな優しい大気の流れは、大量の木の葉を、先ほどまで戦場であった場所に連れてきた。
意識を無くした戦士を葉が覆っていく。
一瞬の無風状態ののち、逆方向に風が吹き、木の葉をもと来た方角へ連れ去っていった。
後には、むき出しの大地だけが残っていた。

◆

午後七時。
終夜営業店だらけの新宿ゴールデン街では、朝みたいな時間だ。
若き元修験者は信じがたい個人情報の前半を一気に話し終えて、

息つぎに水割りを流し込んでいる。身振り手振りを交えてのトークにちょっと疲れたようだ。
風太郎は、退屈なのか、アイヌ少女人形と将棋を指し始めた。
ミリは変な父子を交互に見て、自分の家族のことを思っていた。
今頃、家では、大学から帰ってきた姉が。母と食卓を共にしているだろう。
母は彼らのことをどう食卓の話題にするだろう。

「父さん、気持ちよく話してるとこ悪いけどさ。なんで、意識をなくした後の状況を知ってるのさ」
腕組みをして長考中のマイクロ少女を放っといて、風太郎が突っ込みを入れる。
「そりゃ、おまえ。再構成っつーか。後から聞いた事実って奴？大筋はウソついてないぜ」
メイスケは、半笑いしながら答えて、何杯目かのグラスを干す。
「大筋以外はウソかよ？」
「こういう話はな。演出も入れた方が伝わるんだよ。ところで、ミリちゃん、腹へらない？」
話題転換とばかりに声をあげて、少女の返事を待たずにさらに声を張った。
「モモ、出前とって。中華」
「はい。ご予算は？」
モモは、即返事。父子が嫌みの応酬をするのには関わらない方針のようだ。
「五千円で、よろしく」
「了解。ミリちゃん。苦手な食べ物はある？」
「いえ、だいたい大丈夫です」
「おっけー」
返事をしつつ、モモは携帯電話を取り出した。
「もしもし、ブリーズヒルです。五千円で四人前、おまかせ、なる

はやで」
注文終了。ムダがない。
「よっしゃ。んじゃ、メシが来るまで話の続きだ。俺の意識が戻ったとこから」
メイスケがミリに向き直った。
「ここから先、ますます、ぶっとんだ展開になるけど、ついてきてね。よろしく」
「目の前でこれですもん。なんだって信じますよ、もう」
ミリは、銀と角のどちらを捨てるか悩んでいる少女人形を指さした。
「ふむ。ナイス順応力。じゃ、遠慮なく話させてもらおう」
出会ってから数時間、そぶりですら遠慮をみせたことのない男がそういった。
「父さん、ちょっと待って」
「ん？」
「俺の前で、あの話はするなよ」
「え、あの話？　いいだろ、おまえの母さんの話じゃん」
「どこまで、にぶいんだよ。親にデリカシーを説く気はないからさ。外に出てるよ。ロコ、勝負、ちょっと中断な」
風太？は、ドアを乱暴に開け閉めして出ていった。
「照れてんのかね」
メイスケの言葉を聞いて、モモが「いいえ」を示すかぶりを振った。
「まあ、いいか。ミリちゃん、続きいくよ」
「はい」
風太？の態度のおかげで、ミリの好奇心はパッツンパッツンにふくれあがっていた。

◆

闇に、小さな明かりが灯るように。メイスケの意識がかすかに目覚めた。
闘いの記憶はある。今生に別れを告げる覚悟もした。
今は、死後か？
いや、顔、腕、足、胸、腹、全身に痛みを感じる。
五体全てが、あまり健康ではなさそうだが生きてるらしい。

重いまぶたを開けると、誰かが覗き込んでいた。
四角い輪郭、緑色の肌、人か獣か、それ以外か。
長く眠り続けたせいか、視点がなかなか合わない。
目のピントが決まるやいなや、メイスケは「やっぱり、死んだのか」と観念した。
「天国じゃないのか」
口の中で、そうつぶやいた。
どアップで見えたのは、地獄の住人にしか見えない巨大な顔だった。
ボディビルダーのごとき上半身をした、半裸の初老男性。
抹茶色の肌、白くて太い眉とあごひげ、グリグリとよく動く目玉、耳まで裂けた口、とがった大きな耳、額からは一本角が雄々しく立っている。
抹茶色の男は、うれしそうにいった。
「目が覚めたようやな」
「鬼か？」
「ちゃうわ。こんな品のある顔した鬼が、どこにおる」
「でも、地獄だろ。天国にいそうな顔じゃないし」
「あのな。おまえさん、死んでへんて」
抹茶色の男はふてくされた顔つきになった、そんな顔ですら迫力がある。
近くで女性の声がした。
「ドドウド様。人にとって、その顔は毒ですさかい」

「おまえまで、そないな言い方するんか」
メイスケの視野にもう一人、入ってきた。
長い空色の髪をした少女だ。白い肌に切れ長の優しげな目、緑の瞳が美しい。
薄く小さい朱のくちびるから紡がれる、高く涼しげな声は独特のイントネーション、水飴のように甘い余韻を残す。
「ほんまや。気ぃ、つかれはったわ」
「今度は天使か？」
「ちゃう。天使より、ええもんやで」
「よく見てみたいな」
メイスケは体を起こそうとした。
しかし、痛みにうめいただけだった。
「無理せんとき。ボロボロなんやから。お腹、へってるやろ。なんか作ったげるさかい、でけるまで、寝とき」
「せやな、まだ寝とけ」
視野から、少女が消え、ドドウド様と呼ばれた抹茶色の男もいなくなった。
首が動かせない。まっすぐ見上げる天井は高かった。丈と幅のある大きな葉でできた家だ。編まれているのではない。素直に天へ伸びた草葉が中央でひねりあげられている。
メイスケは、どうすればこんな家を作れるのか、考えてみた。
地面に円を描き、草の種を植える。
十メートルほどに育ったところで、上空から巨大な指で草の先をつまみ、ひねりあげる。
そうすれば、こんな天井になるだろうか。
「キスチョコ、食いたいな」
そうつぶやいて、傷だらけの若者は眠りに落ちた。

メイスケは、夢を見ていた。
草原にいる。

あたり一面、緑の毛皮のよう。
深呼吸をする。全身に緑の生気が満ちてくる。草いきれ、光合成されたばかりの酸素。
胸のすく香りだ。
そして……うまそうな香りだ……
……
……
…
あまりの空腹と、食欲をそそる香りに目が覚めた。
空色の髪をした娘が鍋を運んでくる。緑色の草がふんだんに入った粥だ。
まだ、腕の上がらないメイスケに、少女はフーフーしながら食べさせてくれた。
一度は死を覚悟したメイスケに、警戒心などかけらもなかった。
「あーんして」
少女にいわれるままに口を開けて、米を食べた。熱さと塩味が空きっ腹と、傷だらけの口内に沁みていった。

食後。ドドウドがやってきた。
寝たままのメイスケを覗き込む。
「どやった、四日ぶりの食事は？　挨拶しとくわ。うちらは、風のお守りをする一族や。わてはドドウド。そっちは娘のヒュルリ。可愛いやろ。惚れたらあかんで」
「……」
「あんた、間守の家のもんやろ。そっちの一族とは何百年ものつきあいやし。あんたの親父のリュウとは、ちょくちょく話す仲やしな。困った時はお互い様いうこっちゃ」
「あの、あなた方は……妖怪？」
「うん、そう呼ぶもんもおる。神、鬼、精霊、妖精とか、色々な呼び方をされとる。まあ、好きに呼んだらええよ。ただの山に棲むも

んや。さすがに魔物とか、悪魔といわれたらええ気はせえへんけどな」
「じゃあ。あなたが妖怪で、娘さんが妖精」
「ちょっ、かなわんな。使い分けはなしの方向で。よろしゅう」
「うちは別にかまわへんで」
「わしがかまうっちゅうねん」
協議の末、精霊ということになった。ヒュルリも異存はないようだ。
美しい精霊は、にこやかに微笑みかける。
「メイスケはん。ここは人の世と時の流れが異なりまっさかい。のんびりしていかはり」
「どういうこと」
「時差があってな。ここで十日過ごしても、人の世では一日しか過ぎてへんね」
「浦島太郎ってわけか。まあ、しっかり、養生させてもらうよ。ありがとう」

ドドウドもヒュルリも、見た目こそ妙だが、悪い気は感じなかった。
第一、動かない身体と拾った命で、運命にあらがいようもない。メイスケは迷いもなく、ここで過ごすことを受け入れた。ヒュルリの美しさに惹かれてもいたし。

豆もち、ふかしいも、どじょう汁、アケビやザクロ等々。
日に三度。ヒュルリは、メイスケに食事を用意してくれた。
鬼邦の山で取れる滋養溢れる食事は、若い身体の隅々に力を与えて、傷ついた細胞を癒していく。
意識が戻って十日目の朝。
メイスケは、まだ布団から離れられないものの、どうにか体を起こして食事を取れるようにまで回復していた。

その日、ドドウドは留守にしていた。

今日の朝食は草粥。ここに来て、はじめて口にしたのと同じメニューだ。

ヒュルリ自身は用意するだけ、決して食べない。

「うちら、料理こしらえても口からは食べへんね。匂いを頂くんや。せやから、食事を作り終えた時には、もう満腹やの」

「……じゃあ、もしかして。俺、迷惑じゃない？　その、臭くて。風呂入ってないし」

メイスケの言葉に、ヒュルリは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに「しょうがないな」と言いたげな笑顔になった。

無言で立ち上がり、炊事場へ行った。

しばらくして、彼女は桶を手に戻ってきた。メイスケにその中を覗かせる。

「この、ぬるま湯に浸してあるのは、ヘチマの実を干してほぐしたもん、繊維くずや。ほら、大の字に寝て。体、拭いたげるわ」

「そういうつもりで、いったんじゃ」

「ええの。もう、半月もそのままやんか。気持ち悪いやろ。さあ、寝っ！」

あの道具とこの体勢で何を？……とメイスケはとまどったが、いわれる通りにした。

ヒュルリがくちびるをすぼめた。

ひゅーーーーひゅっ

メイスケの体の下で風が起こった。持ち上げられる。布団から、ほんの少しだが浮いている。

「おおっ？」

重力から解放された感覚に驚きの声を上げた。

桶の上に小さなつむじ風がいくつも起こった。直径一センチくら

い、数十個。
つむじ風に湯が宙へ吸い上げられ、漏斗状に回転する。
湯は、次々にメイスケの方へやってくる。
寝間着代わりに着ている作務衣の襟と袖から、つむじ風が入り、全身を拭いていく。
まだ治っていない傷口はよけながら。くまなく体を清めていく。
少しくすぐったく、この上なく気持ちがいい。
任務を終え、少し黒くなったつむじ風は、ふたたび宙を飛んで、桶へと戻っていった。
「終わったわ。すっきりしたやろ」
ヒュルリは手を引いて、メイスケを起こした。
そして、ひざ立ちになり、近寄り、両肩をつかみ、鼻と鼻がつく寸前まで顔を近づけた。

すうぅぅーーー

鼻から息を吸った。
呼吸を止めて、目を閉じている。
目を開けた。うれしそうに微笑む。
「ええ匂いやわ」
そのまま、精霊少女は、メイスケに寄りかかり、抱きしめた。
メイスケの左肩にあごを乗せた、頬がふれあう。
耳元でささやく。
「山には色々な匂いがあるわ」
甘い声と、唇を開け閉めする音が鼓膜を震わせる。
「花、果物、草、樹、虫、鳥、獣、土、川、魚。みんな、自然のもの。命の香り。メイスケはんからは、人の、命の、匂いがする。自然の、そのままの」
耳元に口を近づける。声にならない声で、ささやく。
「人の、男の、やさしい匂いや。自信、持ってええで」

メイスケは鼓動が早まるだけで、動けない。
「まだ、ほんの少しだけ悪い気が残ってるな？　もっと、ここに居てな。うちが散じたげるさかい。安心しぃ」
体を離した。照れくさげに笑う。
「ちょっと、山菜つんでくるな」
出ていった。
メイスケは、大の字のまま、幸福感に浸っていた。

さらに十日が過ぎた。
メイスケは立ちあがり、家の中を壁づたいで移動できるほどに回復していた。やっとこさだが。
その日も危なげに壁を手繰っていると、ドドウドが心配げな声をかけてきた。
「まだ、横になってた方がええんちゃうか」
「この方がいいんですよ。親父がよくいってました。いじめた方が治りは早いって」
メイスケは、無理な体勢で顔を上げ、微笑んだ。そのせいか、次の一歩でよろけた。
思わず、ドドウドに寄っかかろうと手を伸ばす。
巨大な腹に、指がふれようとした瞬間。緑の巨体から風が起こり、吹き飛ばされた。
腰の高さほどに浮き上がり、ドサッという音を立てて、布団の上に落下した。
「メイスケはん！」
ヒュルリが大あわてで駆け寄る。
「ドドウド様、何しはるんですか？」
少女は、父をにらみつけてから、仰向けでうめくメイスケの頬に両手をあて、顔を覗き込む。その横に緑の巨体がしゃがみこみ、謝りはじめた。
「大丈夫か。ほんま、すまん。わざとちゃうねん」

眉を下げた情けない顔つきで、両手を合わせて、ぺこぺことおじぎを繰り替えす。
メイスケは、ふりしぼるような声を上げた。
「ああぁ……ええ、大丈夫です……布団の上ですし」
「ほうか。そら、よかった。あの、弁解、聞いてくれるか」
「ええ……」
「おおきに。あのな、もう、鬼風の霊気が消えてる思てたんやけどな」
「鬼風？」
「あんさんが戦った、黒い影のことや。わて、前にあれとやりおうた時、あいつの邪気を呑み込んでしもたねん。しばらく寝込んだで。それからや。あれと同じ気を持つもんに触れると、自然と体から風が起こって遠ざけよんね。ほら、ヒトでいうたら、アララギーみたいな」
「あららぎ？……ああ、アレルギー？」
「それや。まだ、あんさんの体から、戦うた時に入った邪気が消えてへんのやな。いまの風の強さからいうて、ほんのちょっとやと思うけど」
「……」
「でも、驚いたな。リュウの修行が厳しいからやろか。思ったよりも早う邪気は消えてる。安心し。ここは気が清澄やし。もう、一週間もしたら大丈夫や思うわ。それまでは、お互い近くに寄りすぎひんようにしよ」
邪気が予想外に早く薄れているのは、ヒュルリの特別な邪気祓いのおかげもあるだろう。ドドウドの留守中のみに行う特別治療だ。
さらに一週間が過ぎた。
メイスケは、壁に手をつけば問題なく歩けるようになっている。
その姿を見て、ドドウドが杖になりそうな枝を持ってきてくれた。
「ありがとう。なにからなにまで」

「気にすなや。見た目も似とるし。家族同然に思うてんね。ヒュルリも嬉しそうやし」
緑色の鬼みたいな風貌のおっさんに、似てるといわれるのは微妙だった。
しかし、ヒュルリが嬉しそうだといわれれば、無条件に気分が良くなる。
「ちょっと、右手を出してもらえますか」
「ん、ええよ」
メイスケの言葉に、ドドウドはなにげなしに、剛毛の生えたぶあつい手を差し出した。
その手をがっちりと握りながら、メイスケは微笑む。
「もう、大丈夫みたいですね。あの、アララギー」
「ほんまや。あとは体力が戻るだけやな。よかったわ。そや、今日はええ天気やさかい、外に出てみいひんか。付き添うたげるで」
ドドウドが案内役になり、メイスケは、初めて精霊の村を見てまわる機会を得た。
杖をついて、おっかなびっくり外へ出る。
足もとに敷き詰められているのは、紅葉のじゅうたん。
一歩め。ふかふかとした感触が懐かしい。
空を見上げる。朝の日射しがまぶしく、下を向いてしまう。
正面には、どこまでも広がる広原。
点々と、オブジェらしきものが目に入る。メイスケが過ごしているのと同じ、草の家をはじめ、丸木を重ねた小屋、重なった自然石、単なる穴、かまくら、巨木の幹に空洞……手乗りサイズから体育館規模まで、形も大きさも様々なものが、野原に散らばっている。
それぞれの周囲の様子も、岩地だったり、池だったり、花が咲き乱れていたり、雪が積もっていたり、季節すらまちまちだ。
「まとまりのない景色だこと」
「おもろいやろ。全部、家や。住んどる精霊によって色々やねん。道々、教えたげるわ」

ドドウドが見下ろして話しかける。話すだけでも胸の筋肉がびくびくと動いている。寝床から見上げるのとは異なり、筋肉の熱気や圧力が伝わる。背も腕の太さや体の厚みも異常だ。

メイスケはあきれがちに「どう考えても鬼だよな」と思っていた。

鬼もどきの精霊は、鼻歌をかなでて、ご機嫌に散歩。立ち止まり、手を上げた。

「おはようさん」

相手は一戸建てサイズの繭から出てきた巨大な白いボールだ。直径およそ1メートル。

あいさつを返したのだろう。その場で、ぴょんと跳ねた。

そして、ぽよんぽよんと宙を泳いでいった。

「あれは虫の精霊や。あの姿、今日は蝶やろな。この時間は卵。昼にさなぎ。夕方に成虫になりよんねん。日替わりで色々な虫になりよるで」

あぜんとするメイスケ。

「いまのは兄貴の方や。あそこには妹もおってな。気のええ子やで。ただ、ずっと地中。あの繭の中に穴があってな。足がぎょうさんあるミミズみたいな姿や。会うてみるか」

「いや、いいです」

「さよか」

また、歩く。

いきなり林があった。野原の真ん中に、そこだけ樹木が生い茂っている。

「ここには獣の精霊が住んだはんねん。ちょっと呼んでみよか」

ドドウドは、口をすぼめて息をフッと吹いた。

木々がザワザワと揺れる。

目の前に、ぬっと巨大な獣が顔を出した。

「ああ、ドドウドはん。どないしました」

ウサギだ。耳がピンと立っていて、焦げ茶色で黒目がち。背丈がドドウドと変わらなければ可愛いと思えるだろう。

「いや、うちの客人を紹介しよ思てな。間守んとこの者や」
「おお、ほうか。あんたがリュウの子か。ええ男やんか。ここな、ヒトがめったに来れるとこやないで。色々と見てったらええ」
「は、はい」
「みんなによろしゅうな」
ドドウドがそういうと、ウサギは軽く手（前足？）を挙げてから、林に戻っていった。
「みんなって？」
「あの林には、狐とか狸とかモモンガとか。山に棲む動物の精霊がみんな棲んどんのや」
その他にも、様々な住民を紹介された。
花の精霊は、根を足のように動かして移動する、見上げるほど高いユリだ。大きく閉じ開きする花弁に頭を食べられそうだった。
水の精霊は、セットで動き回る雨雲と雨と池だ。通り過ぎたあとはビチョビチョだ。
精霊たちと会って、ドドウドがメイスケに「見た目も似とる」といった訳がわかった。
ヒトの形をしている精霊はほとんどいない。
風の親子だけが、娘はもちろん、鬼のような親父ですら、メイスケにそっくりといえる。

草原にヒュルリがいた。
「調子はどないや」
「あら、ごきげんよう。メイスケはん、もう歩いて大丈夫なん？」
「うん、こいつがあるからね」
メイスケは杖をかかげた。
「紹介がてら、あちこち案内したげてんのや。で、今日は家、つくるんか」
「ええ。もうすぐ来やはるし」
「なあ、メイスケはん、あんたの親父、リュウはんのおかげでな。

今度、雷の精霊が越してくるねん。せやから、新居を用意したろ、思てな。ヒュルリにきばってもうてんね。なんでも、住んでた山もろともに水の底に沈んだのを、助け上げられたらしいで」
そういえば、半年ほど前、ダムの底にある神社からご神体を引き取り、間守の末社に加えると聞いた記憶がある。
「雷神様？」
「そや、いかずちの神。カミナリさんや。ガランガ、いう奴でな。遠い親戚やねん。まさか、ここで会えるとは思わなんだわ。リュウに感謝せなあかんなぁ」
「俺の世話をみてくれただけで十分ですよ。親父には俺からいっておきます」
根を足にして歩く草がやってきた。異様に大きい以外は、どこにでもある雑草だ。
「草の精霊や」
それは、ヒュルリと顔（？）を見合わせると、細い茎を手のように伸ばして種をまき始めた。
かなり大きな範囲へ、円を描くように移動しながら種まき。次に、元の場所へ戻って、全身を激しく揺らす。
すると、種がまかれた場所から、たちまち芽が生え、葉となり、ぐんぐん伸びていく。
みるみるうちに、円形の草壁が立ち上がった。その丈、メイスケの背の四倍はある。
ヒュルリが両手を上げて、口から息を吹いた。
手を踊るように、ひらひらと動かす。

しゅうぅぅぅぅぅーーー　ひゅーー　ひゅるん

草壁の上方で、竜巻状に風が舞い始めた。
草の先が大きくなびく。キュッとひねられたようになる。
二回、キュキュッとひねりを入れて、風は消えた。

あとには、ドドウド家と同様の住居が建った。

「すっげー。みごとなもんだ！」

メイスケが、歓声をあげる。

ヒュルリは、頬を赤らめて、「やめてえな」と右手をふる。うれしそうだ。

ドドウドは、微笑みながらうなづく。

草の精霊も、葉と枝の位置と動き的に、腕組みをしてうなづいているようだった。

それから一週間後。

夕方、ガランガがやってきた。

こちらも鬼そっくり。肌はベージュ、ぐりっとした目に豚鼻。体格は、ドドウドを少し太らせてゆるくした感じで、不細工度は五十歩百歩だ。

「おおきに。お父上のおかげで命拾い致しましたわ」

メイスケは、初対面の雷神に丁重なお礼をいわれた。

適当な性格だが、一応、修行者。さすがに神様相手では緊張もする。

「いえ、父も、当然のことをしたまでです。あの、お役目ですし」

ドドウドが口をはさむ。

「メイスケはん。なに、しゃちょこばってんねや。わての親戚や。気楽につきおうて」

メイスケが「よろしく」と頭を下げると、ドドウドはガランガに向き直った。

熱気あふれる熟年ツーショット。

「なあ、ガランガ。歓迎会をしたいのは山々やけど。来て早々に仕事や。すまんな」

「のぞむとこや。腕、鳴るわ。ずっと、水の底で退屈やったからな」

「メイスケはん、ヒュルリ。朝まで台風や。二人でちょっと行って

くるわ」
「はい。お二人ともお気をつけて、おきばりやす」
メイスケとヒュルリ、その夜は初めて過ごす二人きりの夜だった。

◆

ブリーズヒルの独演会は、話し手だけが大盛り上り。まわりの迷惑顧みず、はしゃぐわ、照れるわで大騒ぎだ。そして、彼のテンションと反比例して、店内は気まずい空気に満たされていった。
「囲炉裏の炭火と小さな松明だけが明かりでさ。ヒュルリの息が荒くなると風が吹いて、炭火や松明がパッと強くなる。その瞬間、朱色の炎が白肌を照らすわけだ」
ミリは心のなかでぼやいていた。
『これを息子の前で話そうとしてたのか。そりゃ、逃げるわ』
堪えきれなくなった彼女は、話題を変えるべく、声を上げた。
「すいません。あの！」
「ん？」
「どっ、どうして東京へ来ることになったんですか」
「あ？　ああ、ヒュルリと結ばれて三日後に精霊界を出たんだ。結局、ひと月半くらいいたんだけど、人の世では四日しか過ぎてなかった。あそこでの出来事は誰にも話さなかったんだけど。しばらくして、ちょっとまずいことになってね」
メイスケの顔色が変わった。深刻そうに眉根を寄せている。
「いきなり、凄まじい嵐が鬼邦の里を襲ったんだ。何日も止まなかった。神社の瓦は飛び、建物は軋み、ふもとの村にも結構な被害が出たんだ」
かぶりを振り、話を続ける。
「原因は、いわゆる、親バレ。ドドウドが怒っちゃったんだよな。うちの親父と話し合って、なんとか治めてくれたんだけど。俺が里を出て行くことになったんだ」

グラスにウイスキーを注ぎ足し、あおった。
「俺が行かなければ、人の住めない里にしてやると脅されてね。結局、村のことを思って、泣く泣く故郷を捨てたわけ。親父の伝手で東京の神社へ勤めたけど、水が合わなかったんで、とっとと辞めて。フリーランスでお祓いや占いを始めたんだ。どうにかなるさってね」
いいっぷりの大人げなさに、ミリはあきれていた。
「まあ、山伏修行はまじめにやってたからさ。占いは当たったし、幽霊や妖怪だって、金さえもらえたら、なんだってやっつけてた。でもなあ、二年前からそうもできなくなったんだ」
メイスケは入口の方を見やった。
「風太郎が訪ねてきたんだよ。どうも、精霊界は住みにくかったらしい」
「じゃ、やっぱり、彼は」
「あっ。いや、えっとさ、そうだな……奴は正真正銘、俺の子だ。それ以上は、今はいいだろ？　とにかく、あいつと会って、抱きしめた時は涙が出て止まらなかった。居場所がない連中の辛さや切なさが一気にわかっちまってさ。あれから、迷ってる霊や妖怪を乱暴に扱えなくなっちまったんだ」
さらにウイスキーを注ぎ足し、あおる。氷は溶け切っている。ほぼストレートだ。
「なんでもかんでも退治しないと職業霊能者なんか、おまんま食い上げさ。それで、この店を構えたんだ。食うためと、俺とあいつの居場所を作るため。なんか、なりゆきで、行き場のない妖怪や精霊の面倒まで見るはめになったけどな。こいつらも退治できてれば、結構な金になったんだぜ」
モモとロコが肩をすくめた。

その時、入口のドアが開いた。
「父さん、もういいかい？　出前が来てるぜ」
「ちょうど、キリのいいとこだ。入ってもらえ」

将棋盤のまわりをうろうろしていたロコはその場にしゃがんで完全静止、銀将を抱きしめた人形となった。
「まいど、ハオチー酒楼です。おまちどうさま」
坊主頭の若者が岡持ちを手に入ってきた。カウンターに次々と料理が並べられていく。
「冷菜盛り合わせ、餃子、酢豚、エビチリ、フカヒレスープ、鯛の丸揚げ、海鮮野菜炒め、チャーハン」
カウンターに次々と料理が並べられていく。
モモが出前の兄さんに声をかける。
「ずいぶん、気前がいいのね。本当に五千円でいいの？」
「はいっ、毎度。これ領収書ね。あの、マスター」
「なんだい」
「ママさんが、明日のアレ、よろしくって」
「こんだけサービスしてくれたんだ。こっちも大盛りサービスすると伝えといてくれ」
「あい、ありあとやしたー」

出前が出ていくと、風太郎がガッチリと鍵をかけた。
それを見届けてから、メイスケが両手を広げて音頭を取った。
「ディナータイム！　モモ、こっからはビールよろ。ミリちゃん、遠慮せずに食べな」
バーカウンターでの豪勢な夕食のスタートだ。
モモは、小皿に料理を取り分けて、ロコへ渡した。
でも、小美人は食べない。いかにも美味しそうな表情で、匂いをかぐだけだ。
「うまいか。ロコ」
ロコの幸せそうな微笑みにうなづき返してから、メイスケはミリに向き直った。
「ロコは北海道から家出してきた、不良娘。コロポックルっていう精霊だ。ボロボロになってたとこを助けてやって。それからは住み

込み従業員ってわけ」
「野良猫に追っかけられてたとこを、私が助けたの」
モモは、そういって餃子を一口で頬張る。
「あの、モモさんは精霊じゃないんですか？」
「ん？　んが、んぐ」
モモは目を見開き、ビールを一気に流し込んだ。
「げふっ……私は霊じゃないもの。ちょっと長生きしたフェレット。気がついたら、人の格好になれちゃって」
「モモはさ。ネコ妖怪ネコマタのフェレット版、いわばフェレマタなんだよ」
「店長、それをいうなら、華麗に、フェルマータと呼んで」
メイスケは、失礼しましたとばかりに大仰に頭を下げた。
「さてと、ミリちゃん。うちの店の秘密、ざっくり話したからさ。もう身内だ」
「え？」
「ここまで聞いた以上、ただじゃ帰さないよ」
「はい？」
「風太？、学校はバイト、オッケーだよな」
「ああ、ばれなきゃ問題ない」
普通、それはオッケーとはいわない。
「じゃあさ。ミリちゃん」
メイスケはシリアスな表情で女子中学生に迫る。
「明日から、学校帰りにうちで働いてもらおうか。もちろん、バイト料は払う」
「！　そんな一方的に。だいたい、ここ酒場じゃないですか、中学生はさすがに」
「そうかぁ？　……じゃ、こうしよう。明日からうちは午後七時までカフェタイム。その間は未成年もノープロブレムな健全飲食店ってことで。放課後から七時まで、よろしく」
「いやあ、でも、ほら、お母さんにも相談しないと！」

「バイト代はね……一日二千円。月に二十日なら四万円」
「あ、やっても…いいかな」
その返事を聞いて、固唾を飲んで事態を見守っていたフェルマータが叫んだ。
「ありがと〜」
カウンターから飛び出すようにして、ミリに抱きつく。
柔らかな感触に包まれた女子高生は、とまどいながら声を上げる。
「ちょ、なに、どういうこと」
帰り道、風太郎が説明してくれた。裏の仕事と店の特性上、誰かを雇うのは難しく、モモは開店準備から閉店まで、一人で働いていたという。店長はいい加減で、酒を飲んでばかりだし、同僚は戦力外のサイズなのだから、仕方ない。
「あーっと、私、もしかして、はめられた？」
「ううん、タイミング。いいじゃん。気楽な仕事だ」

こうして、ブリーズヒルの仲間が増えた。
この店では、二人目になる生粋の人間だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8736z/

ゴールデン街の風太郎

2011年12月28日02時47分発行